

ジャーナリストの視点から 手と手をつないで

No.332

にし お のりおみ
西尾 紀臣

(福岡県・福岡市人権・同和問題研修の講師団講師)
(元毎日新聞社記者)



あなたから始まる優しさ

突然、私の住むまちのサイレンが鳴った。東日本大震災の発生時刻、午後2時46分に合わせて、亡くなった方々への黙祷を呼びかけるサイレンだった。

あの日のその時刻、大分行き特急列車の車内にいた。急停車し、車内放送が流れた。「大分まで行き着けるかどうか、わかりません」「東北方面で大地震が発生したようです」こんな事態は初めてで、不安感がふくらんだ。止まったり、動いたりしながら、とにかく大分駅にたどり着いた。ホテルに飛び込み、テレビをつけた。大津波がまちを飲み込む惨状に言葉を失った。

私たちは10年前、福岡県西方沖地震を体験した。私の住む糸島市は震度6の烈震で、家の中で立っていられなかった。ふるえる愛犬モモを抱っこし、連れ合い共々テーブルの下に伏せ続けた絶望的な体験とも重なり、まんじりともせずホテルの一夜を明かしたことを忘れない。

大きな風が吹くと、普段見えないことがみんな白日の下にさらされると言

うが、大震災でもそうだった。私たちの社会にはこんなにも人権をおろそかにするケースがあったのか、あらためてびっくりし、考えさせられた。わけでもひどいなあと思ったのが福岡県外に嫁ぐ予定の女性が、福岡出身を理由に婚約を解消されたこと、「私たち、もう結婚できないかも」いわれなき差別の中で、不安におびえる女子生徒が多いと、知ったことだ。「ぎずな」「共にかんばろう」の合い言葉の裏側で、社会的排除は今も静かに、深く進行している。

忘れられない投書がある。宮城県14歳の女子中学生だった。こんな被災者への差別や偏見にあ然とし、あきれはてて「大人になんかなりたくない」「あんな大人と一緒にされたくない」「私は間違ってますか」と問いかけたのだ。

そんな時、目にしたのがある随筆家の提言だった。これなら今からすぐにできますよと言うのである。それは「あなたのすぐそばにいる人に優しくしてあげることです」と。自分から始まった優しさで、人と人がつながって、巡り巡ってその優しさはやがては被災地

へと届く、被災者の方々をつなぐことができる。大震災を改めて「生き直す」きっかけにしようとの提言だ。私たちの福岡県でも3年前の今頃、九州北部豪雨が発生した。塗炭の苦しみを経験した八女市の市長は「災害の発生はいつ、どこで起こっても不思議ではない」との思いを口にしていた。あなたから始まって優しさが広がり、人と人がつながっていけば、温かくて、住みよい素敵なまちにも、災害に強いまちにもなっていくのではないだろうか。

平成26年度人権作品集から

太宰府中学校1年

清水 凜さん

